

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	
抗白癬菌成分	エキサラミド	医療用医薬品としてなし														
	塩酸アモロルフィン	ベキロンクリーム 抗真菌作用・塩酸アモロルフィンは皮膚系真菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)、黒色真菌(Fonsecaea compactum等)及び腐風菌(Malassezia furfur)に強い抗真菌作用を有した。作用機序 塩酸アモロルフィンの作用機序は、エルゴステロール合成経路上の2つの段階を選択的に阻害することにより、細胞膜の構造、機能を障害し抗真菌活性が発現される。					0.1~5%未満(局所の刺激感、接触皮膚炎、発赤、そう痒、紅斑)0.1%未満(糜爛、疼痛)			本剤成分過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠の可能性のある婦人			投与部位 眼科用として角膜、結膜には使用しない。	1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療・白癬、足白癬、手白癬、体部白癬、股部白癬・皮膚カンジダ症、指間びらん症、間擦疹(乳児寄生菌性紅斑を含む)、爪囲炎・皸風

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に関するもの 適量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果
抗白癬菌成分	塩酸ネチコナゾール ・アトラント軟膏1% ・アトラント外用液1%	抗真菌作用 ・塩酸・ネチコナゾールは、皮膚糸状菌をはじめ酵母菌など、優れた抗真菌作用を示した。主な臨床分離株に対する最小発育阻止濃度(MIC)は次のとおりである 作用機序 塩酸ネチコナゾールの作用機序は、完全発育阻止及び細胞膜作用を示す高濃度域で直接細胞膜障害が、また部分的発育阻止を示す濃度域においては真菌細胞の構成成分であるエルゴステロールの合成阻害が主で、この作用による膜脂質組成の変化が前者の作用を増強するものと考えられる。				本剤成分過敏既往歴、著しい糜爛面	亀裂、糜爛面(アトラント外用液)		適用部位 ・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しい糜爛面には使用しない。 ・亀裂・糜爛面には注意して使用する。		1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬、足白癬、体部白癬、股部白癬 ・皮膚カンジダ症、指間びらん症、間擦疹 ・癬風

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗白癬菌成分	塩酸ブテナフィン	モンタックスクリーム・液・スプレー	抗真菌作用・抗真菌活性塩酸ブテナフィンは皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)及び腐風菌(Malassezia furfur)に対して強い抗菌力を示し、その作用は殺菌的である。作用機序塩酸ブテナフィンの作用機序は、真菌細胞膜の構成成分であるエルゴステロールの合成阻害であるが、その作用部位はイミダゾール系薬剤と異なりスクワレンのエポキシ化反応阻害に基づいている。			0.1～5%未満(局所の発赤・紅斑、そう痒、接触皮膚炎、刺激感、水疱)0.1%未満(糜爛、落屑、亀裂)0.1%未満(安全性評価対象例9,517例中、131例(1.38%)206件)主な副作用局所の発赤・紅斑54件(0.57%)、接触皮膚炎39件(0.41%)、そう痒39件(0.41%)、刺激感22件(0.23%)等							液・クリーム 1日1回患部に塗布する。 スプレー 1日1回患部に噴霧する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬、足部白癬、股部白癬、体部白癬 ・癬風	
	クロトリマゾール	タオンゲルクリーム・液	タオンはCandida属、Trichophyton属、Microsporum属等に対し強い抗菌作用を示す。			0.1～5%未満(局所の刺激感、皮膚炎、熱感、発赤・紅斑)0.1%未満(糜爛、丘疹)							使用部位 眼科用として角膜、結膜には使用しない。 著しい糜爛面には使用しない。(ハクセリンより)	1日2～3回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬、足部白癬、趾間白癬、趾間口白癬、頑癬、堤状小水疱性白癬 ・カンジダ症：指間糜爛症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、皮膚カンジダ症、爪囲炎・癬風

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果							
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗白癬菌成分	シクロピロクスオラミン ・ハトラフェンクリーム ・ハトラフェン液	抗菌作用 シクロピロクスオラミンは皮膚糸状菌及び酵母類に広く抗真菌作用を示し、その作用は殺菌的である。 ・多くのグラム陽性、陰性の細菌類にも抗菌作用を示す。 作用機序 真菌細胞の膜及び膜系に作用して、細胞の増殖・生存に必要な物質の輸送機能を阻害し、真菌を死に至らしめるものと考えられている。MICレベルでは、外部浸透性(電解質、各種栄養分)の細胞内への取り込み及び細胞内高分子物質(タンパク、DNA、RNA)の合成を阻害し、菌の発育を阻害する。高濃度(殺菌濃度)では、更に膜透過性も悪を示す。また、K ⁺ アミノ酸等の菌体成分の漏出を促進させ、菌を死滅させる。			クリーム 0.1~5%未満(皮膚炎、皮膚刺激作用) ハトラフェン液 (※クリーム剤と同様の副作用報告)		本剤の成分過敏症既往歴、著しい糜爛面	・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人 ・低出生体重児又は新生児 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール等)の局所刺激作用(ハトラフェン液) ・亀裂・糜爛面(ハトラフェン液)					使用部位 ・眼科用として角膜・結膜には使用しない。 ・著しい糜爛面には使用しない。 ・亀裂・糜爛面には注意して使用する。	1日2~3回患部に塗布又は塗擦する。	・白癬・体部白癬、股部白癬、汗疱状白癬・カンジダ症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、指間糜爛症			

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化								
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの				過量使用・誤使用のおそれ
抗白癬菌成分	絹族エコーゾール	ハラベールクリーム・液	抗菌活性 ・本剤の抗菌スペクトルは広く、皮膚糸状菌、Candida albicans、その他のCandida属菌種、Candida以外の酵母及び酵母様真菌、黒色糸状菌、Aspergillus属菌種、Penicillium属菌種、放線菌、グラム陽性細菌に対して強い抗菌活性を示す(in vitro)。 作用機序 本剤の作用機序は、細胞膜に一次作用点を有し、物質輸送と透過性障壁を阻害し、高分子物質合成阻害と呼吸阻害を二次的に誘起させ、更に高濃度ではRNA分解を促進し、細胞発育阻止又は細胞死に至らしめる														下記の皮膚真菌症の治療 白癬、足部白癬(汗疱状白癬)、手部白癬(汗疱状白癬)、体部白癬(斑状小水疱性白癬、頑癬)、股部白癬(頑癬) カンジダ症、指間びらん症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、爪囲炎、外陰炎(ただし、外陰炎はクリームのみ適用) 皰風
				0.1~5%未滅(皮膚刺激症状(発赤・紅斑、刺激感、そう痒、灼熱感、疼痛等)、皮膚炎、びらん、水疱、腫脹) 0.1%未満膿疱、丘疹				本剤に過敏な患者 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性基剤が局所刺激作用)(液のみ) ・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人				眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・本剤の基剤の油脂性成分は、コンドーム等の避妊用ラテックスゴム製品の品質を劣化・破損する可能性があるため、接触を避けさせる(クリームのみ)			通常1日2~3回患部に塗布する。		

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 盗用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要する (適応を誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ
抗白癬菌成分	硝酸オキシコナゾール オキナゾールクリーム液	抗菌作用(in vitro) 硝酸オキシコナゾールは皮膚糸状菌、酵母状菌、二形性真菌(臨床分離株)等に対して広範囲な抗菌スペクトルを有し、そのMICは10 µg/ml以下であった。また、好気性、通性嫌気性のグラム陽性球菌及び桿菌に対しても抗菌活性を示すことが認められた。作用機序 硝酸オキシコナゾールの抗真菌活性は、直接的細胞膜障害作用により発揮される。また、低濃度域での部分的発育阻止効果には、エルゴステロール合成阻害作用が関与している。				0.1~5%未滅(局所の発赤、刺激感、接触皮膚炎、そう痒) 0.1%未滅(局所の腫脹) クリーム剤 総症例数 11,737例中 117例 (1.00%)196件 主な副作用: 発赤61件 (0.52%)、刺激感46件 (0.39%)、そう痒の増強40件 (0.34%)、接触皮膚炎40件 (0.34%)等 液剤 総症例数 2,226例中46例 (2.07%)70件 副作用の内訳:刺激感32件 (1.44%)、発赤19件 (0.85%)、接触皮膚炎11件 (0.49%)、そう痒の増強8件 (0.36%)			本剤の成分過敏症既往歴、著しい皮膚面 ・乳児帯生菌性紅斑(アルコール性基剤が局所刺激作用。液のみ) ・亀裂、びらん面(刺激を生じることがある。液剤)			使用部位 ・眼科用として角膜、結膜に使用しないこと ・審しいびらん面には使用しないこと ・液剤は、刺激を生じることがあるので、亀裂、びらん面には注意して使用すること ・使用時 ・クリーム剤の基剤の油脂性成分は、コンドーム等の避妊用ラテックスゴム製品の品質を劣化・破損する可能性があるため、接触を避けさせること	1日2~3回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 白癬、足白癬、手白癬、股部白癬、体部白癬 カンジダ症、間擦疹、乳児帯生菌性紅斑、指間びらん症、爪囲炎、その他の皮膚カンジダ症 菌風	

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
評価の視点		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
硝酸ミコナゾール	・アムリド D軟膏 ・フロリードDクリーム ・フロリードD液	抗菌作用(in vitro)→フロリードD(クリーム)より真菌に対する作用 硝酸ミコナゾールは白癬の起原菌である白癬菌属、小胞子菌属、表皮菌属やカンジダ症の起原菌であるカンジダ属をはじめ、アスペルギルス属、クリプトコックス・ネオフォルマンス等の諸菌種に対しても強い抗真菌作用を有する。 作用機序 硝酸ミコナゾールの抗菌作用、生化学的作用及び超微形態学的作用を検討した結果、硝酸ミコナゾールは低濃度では主として膜系(細胞膜並びに細胞壁)に作用して、細胞の膜透過性を変化させることにより抗菌作用を示す。また、高濃度では細胞の壊死性変化をもたらし、殺菌的に作用する。			頻度不明(発赤・紅斑、そう痒感、接触性皮膚炎、びらん、刺激感、小水疱、乾燥・亀裂、丘疹、落屑、腫脹等) フロリードDクリーム 総症例28,803例中231例(0.80%) 主として、発赤・紅斑(0.35%)、そう痒感(0.21%)、接触性皮膚炎(0.13%)、びらん(0.08%)、刺激感(0.07%)、小水疱(0.07%)等の皮膚炎症状であった。 0.1～5%未満(発赤・紅斑、そう痒感、接触性皮膚炎)0.1%未満(びらん、刺激感、小水疱、乾燥・亀裂、丘疹、落屑、腫脹等) フロリード液 総症例2,587例中34例(1.3%) 主として、そう痒感(0.4%)、発赤・紅斑(0.3%)、刺激感(0.2%)、落屑(0.2%)、乾燥・亀裂(0.2%)、疼痛(0.2%)等の皮膚炎症状であった。 0.1～5%未満(そう痒感、発赤・紅斑、刺激感、落屑、乾燥・亀裂、疼痛、小水疱等)			本剤の成分過敏症既往歴	・妊婦(3カ月以内)又は妊娠の可能性のある婦人 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性基剤(エタノール等)の局所刺激作用。フロリードD液)			使用部位 眼科用として、角膜、結膜には使用しない。 その他 本剤の基剤である油脂性成分は、コンドーム等の避妊用ラテックスゴム製品の品質を劣化・破壊する可能性があるため、接触を避けさせる。	1日2～3回患部に塗布する	下記の皮膚真菌菌の治療 白癬(斑状小水疱性白癬、頑癬)、股部白癬(頑癬)、足部白癬(汗疱状白癬) カンジダ症(指間びらん症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、爪間炎、外陰カンジダ症、皮膚カンジダ症、皸風)	
チオコナゾール	医療用医薬品としてなし														

抗白癬菌成分

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果											
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ			適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ							
抗白癬菌成分	トルナフナート ハイアラージェン軟膏・液	各種真菌類に対するトルナフナートの抗菌力 対象菌 MIC (μg/mL) Trichophyton rubrum 0.0125 T. interdigitale 0.025 T. asteooides 0.025 Microsporum gypseum 0.0125 Microsporum japonicum 0.005 Epidermophyton argonale 0.005 Candida albicans > 500 Cryptococcus neoformans > 500 Aspergillus fumigatus > 500 Aspergillus niger 0.0125				0.1%未満(局所刺激、発赤、皮膚炎等) 頻度不明(過敏症状)			本剤成分過敏症既往歴	・広範囲の病巣に使用する場合	・患部が化膿しているなど湿潤、ひららが著しい場合にはあらかじめ適切な処置を行った後使用する。	・長期間使用しても症状の改善が認められない場合、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		・眼科用に使用しない。			通常、1日2～3回、適量を患部に塗布又は塗擦する。	汗疱状白癬、頑癬、小水疱性斑状白癬、癬風				